

平成 27 年度 奈良 ASP ネットワーク
第 4 回 ESD子どもキャンプ
報 告 書



平成 28 年 3 月
国立大学法人奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の
養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

第4回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修 4回生 糸綾香

平成27年8月22日、23日に奈良教育大学において、第4回ESD子どもキャンプを開催した。これは奈良市のユネスコスクールに通う小学5・6年生と中学生を対象に、ESDを楽しく体験的に学んでもらうことを目的としている。本年度は手作りのピンホールカメラを用いて、お気に入りの奈良の風景を撮影し、その一瞬の中に込められた撮影者の子どもたちの思いや、これからその奈良の景色がどうなっていくってほしいのかを考える活動を通して、世代間、世代内の公正を学んでいった。

この子どもキャンプを通して学び、感じたことを3つ述べたいと思う。第1に総括という立場から見た景色について、第2に参加学生への心のケアや関係性について、第3に来年に向けてである。

第1の総括の立場から見えた景色についてである。私はこのキャンプにおいて、運営班に入りキャンプ全体の総括を行う立場についた。そこから見えた景色は、去年担当したカウンセラー長の時とは大きく違った景色だった。責任が重く、各企画の進捗状況から参加学生の名簿管理、物品管理、しおり作成、ご協力いただく先生方への挨拶など山ほど仕事がありながら、今、何をしなければいけないかを把握することができず、たくさんの人々に迷惑をかけながらキャンプ当日を迎えてしまった。終わってみると、もっと早くから仕事を始めれば良かった、もっと役割を分担して作業を行えば良かったなどの反省がたくさん出てくる。今回の反省を活かし、次に私の立場に立つ後輩のサポートを行いたい。

第2の参加学生への心、そして気持ちよく活動してもらうためのケアについてである。去年はカウンセラー長として準備期間中やキャンプ当日も、参加学生の様子をよく観察し、声をかけ、活動班の学生も運営班の学生も活動をしやすいような環境を整えるよう心掛けていた。しかし今回は、自分がやらなければならない仕事に気を取られ、全く彼らのことを考えることができなかった。その結果、当日の班活動や裏方の活動を行うときも、彼らに対し混乱を招き、安心して活動できるような環境を十分に整えることができなかった。もちろん彼らは参加した子どもたちとともに、子どもたちだけでなく、学生の心に残る充実した活動をしてくれたが、しかしもっと不安要素を無くし、サポートしていれば、当日も混乱なく活動することができたと思う。



からくりおもちゃ館での様子

第3の来年に向けてである。大きな目標として、次にキャンプをそしてユネスコクラブ全体を引っ張っていくことができる人材を育てることである。今回、私は次の世代のことについて考える余裕もなくキャンプを終えてしまった。活動班の名簿管理や、キャンプを通じたギターの演奏など、来年度で参加が最後になる私だけで行ってしまったことがたくさんある。次に向けて、そしてその次に向けて、このESD子どもキャンプ、そしてユネスコクラブを支えていってくれる人材を育てていきたいと思う。

今回のキャンプは個人として、いつも以上に反省の多いものになってしまった。しかし、反省から見えてくることも多い。今後のユネスコクラブの活動が続いていくように、私が後輩たちのためにしなくてはならないことは、人材育成と4回のESD子どもキャンプで培ったノウハウの伝達であると思う。後輩たち、そして先輩たちとの信頼関係を今一度見つめなおし、再構築していきながら、来年のキャンプにつなげたい。来年、キャンプに来た子どもたちが、そして学生も大人も、「また来たい、またやりたい」と思える活動を目指して、活動していこうと思う。

第4回ESD子どもキャンプを終えて

国語教育専修 3回生 吉門歩実

2015年8月22日と23日、奈良教育大学において第4回ESD子どもキャンプが行われた。今年は「とき～みんなの心がときめく瞬間（とき）～」をテーマとして、様々な活動を行った。

私がESD子どもキャンプに参加したのは今回で三回目であるが、今までとは違い、活動班に入らず運営班として参加した。また、企画を考える段階では初めてキャンパスフィールドワーク班のリーダーを務めた。よって、これまでのキャンプでは気づけなかった新たな学びが多く、充実したキャンプとなった。今回学んだこと、感じたことを主に3つ挙げたい。一つ目に運営班としての事前準備の大切さについて、二つ目に企画班の中での連携について、三つ目に当日の動きについてである。

まず、運営班としての事前準備の大切さについてである。今回初めてキャンプの運営側に携わり、その仕事の多さを知った。参加者を募るためのチラシを作成したり、当日使用するしおりを作成するために各企画班から提出される案を添削したり、どの活動班にどの学生、どの子どもを入れるかを考えたり、物品や朝食、昼食の準備をしたりするなど、去年までは知らなかった仕事が多くあった。さらに、それらの仕事を手際よく短期間でやらなければ、各企画班や先生方などに迷惑がかかることになり、キャンプ当日にまで影響するということが気づいた。私は初めての運営側であり、キャンパスフィールドワーク班に入っていたということもあり、運営班の一員として十分に動くことができなかった。先輩方に頼りすぎてしまったり、要領よく仕事をこなすことができなかったりしたので、今回の反省を生かして、今後はより積極的に迅速に自分のやるべきことができるようになりたい。



講堂前にて、キャンプ参加者の集合写真

次に、企画班の中での連携についてである。

今回、キャンパスフィールドワーク班には、私の他に2回生3名、1回生2名が入っていた。この班の中では私が最上回生であり、リーダーでもあったので、どのように仕事を割り振り連携していくかを意識した。しおりを作成する際には担当わけをし、当日の寸劇についても下回生中心に考えてもらい、私はそれらの意見や案をまとめる役にまわることにした。若干私が方向づけをしてしまった部分もあったが、班の全員が積極的に意見を出したり真面目に仕事に取り組んだりしたおかげで、とてもスムーズに作業を進めることができた。今後は、より上手に下回生の意見を引き出し、生かせるようにするためにはどうすればよいのかを考えていきたい。

最後に当日の動きについてであるが、上述したように私は活動班に入っていなかったため、当日は主に、次の活動のための準備や前の活動の後片付け、物品や貴重品などの管理、整理などを行っていた。その中で、次の活動はもちろん、さらに先のことまで考えて行動することや常に状況を把握することの重要性を感じた。当日何度か、何をすべきか分からなくなって先輩方に聞くということがあったが、前もって自分の当日の動きを十分に確認し、疑問点を解消しておくべきだったと感じた。今後は、しっかりと自分のすべきことを把握し、一歩先、二歩先まで見据えられるようにしたい。

以上のように、今回のキャンプには今までとは異なる立場で参加し、多くの学びを得ることができた。反省点も多くあるので、次のキャンプまでに改善していきたい。

E S D子どもキャンプを終えて

社会科教育専修 3回生 黒木純

8月22、23日の2日間にわたり、「2015年奈良ASPネットワーク第4回E S D子どもキャンプ」が奈良教育大学で開催されました。そこで、私は昨年引き続き、今年も学生スタッフとしてこのキャンプに参加しました。

キャンプを終えて振り返ってみると、私は大きく3つの学びを得ることができました。一つ目はE S Dとつなげることの大切さ、二つ目は先読みし動くことの大切さ、三つ目は人とのつながりの大切さです。

一つ目のE S Dとつなげることの大切さですが、これは同時に難しさでもありました。振り返ってみると、活動班において、フィールドワークなどでE S Dに触れる機会はたくさんあったはずなのに、なかなか伝えるということが出来ませんでした。参加した子どもにとってE S Dを理解することはできなかったとしても、各企画の中でもっと伝えることが出来たのではなかったかというのが、今回の一番の反省です。子どもに伝えるということは、自分が理解しておかなければなりません。また教師になろうとしているからこそ、このような子どもたちと関わることのできる数少ない機会にE S Dを少しでもわかってもらえるように、今後活動していかなければいけないと思いました。

二つ目の先読みし動くことの大切さですが、子どもと関わりながら同時に先のことを考えるということがとても難しく感じました。班活動に参加して、今回で三回目だったのですが、二日目の朝に子どもたちが、テントの中に財布を入れたまま、朝散歩に行こうとしていました。行く直前になり、他の班で同じようなことが起きているのを聞いたので対応できたものの、自分では全く気付いていませんでした。上回生であるにも関わらず、このようなことに気付けなかったことは反省であり、貴重品の管理ということと共に、状況を先読みして考えて動いていきたいと思いました。

三つ目の人とのつながりの大切さですが、今回のキャンプでは、活動班に参加させてもらい人と関わる機会がとても多かったように感じます。企画班では、あまり準備に参加できなかった私に、さまざまなことを教えてもらったり、活動班でもキャンプ当日には、自分が気づいていないことに他の学生スタッフがもうすでに動いてくれていたり、初めて会った子どもたちとひとつのテントで寝たりと、とても多くの人と関わり、そして助けられながら活動ができました。子どもたちも2日間という短い時間の中で、初めに会った時の不安そうな顔から、最後にお別れをする時の寂しさと楽しかったというような満足感に包まれたような顔になっていたことがとてもうれしく感じました。今後も様々な活動の中で多くの人と関わりを持ち、つながりを大切にしていきたいと思います。

今回のキャンプのテーマの「とき」は、ピンホールカメラなどを使い、一瞬に着目して活動できたのでよかったです。そして何よりも多くのことを経験し、子どもがやっぱり好きだなと改めて思うことができました。これからもユネスコクラブで貴重な経験を積み重ねていきたいです。



活動班の集合写真

子どもキャンプを終えて

社会科教育専修 3回生 仲孝昌

8月22日、23日の2日間を使って、第4回ESD子どもキャンプを実施した。今年は『とき』をテーマにプログラムを構成した。一日目にはピンホールカメラを作成し、作ったピンホールカメラを持ってキャンパス探検やフィールドワークを行い、子ども達が撮りたいと思った瞬間の風景を撮影した。また、夕食やお風呂は奈良町の飲食店や銭湯に行き、子どものみならず学生からも初めての体験だったという声があがった。夜は付属小学校のグラウンドでキャンプファイヤーを実施し、スタンツでは各班の一日の様子などから親睦が深まった様子がうかがえた。二日目は百毫寺方面への朝散歩、一日目に撮影した写真を入れるフォトフレーム作りをし、午後からは撮った写真とフォトフレームを使った発表会と振り返りをして解散となった。

今回のキャンプの中で感じたことは仲間との連携についてである。その理由として第1に活動班、第2にキャンプファイヤー、第3に事前準備が挙げられる。

一つ目に活動班についてであるが、活動班では各班4人の学生がついて子ども達の学びのサポートをした。その中で班の雰囲気盛り上げる人、時間の管理がきちりしている人、全体を見て気配りのできる人など人それぞれ徳分がある。今回活動班に入って活動したが、みんなが自分の持ち味を生かし、些細なミスがあった時や、企画で一時抜けるときにも補い合い、円滑に班活動をすることができた。

二つ目にキャンプファイヤーについてであるが、今回、私はキャンプファイヤーのプログラムに携わった。企画班が発足して企画を詰めていく中で、様々な事情でキャンプに来られなくなった人がいて、さらには直前に体調を崩す人もいた。一時はこのままではキャンプファイヤーができないのではないかと考えたが、仲間から「手伝おうか」と声をかけてくれる人や、急に無茶なお願いをしても引き受けてくれる仲間がいてなんとか本番を迎え、無事誰ひとり怪我なく終えることができた。

三つ目に事前準備についてであるが、活動班にしても各企画班にしても、本番をむかえるにあたって何度も会議を重ねて準備をしてきた。活動班では班で食事に行き親睦を深めつつ、この子どもキャンプに初めて参加する1回生に上回生から去年の様子や注意点、アドバイスなどをして本番を迎えた。企画班ではプログラムの中身を組み立て、物品の準備等も行った。キャンプファイヤー班では人数が少なかったため何度も会議を重ねてセリフやゲームを確認した。本番では時間がかなり遅れていたこと等も重なり想定通りとはいかなかったが、その場で連携をとって対応することができた。

今回の子どもキャンプを通して、私は仲間との連携の大切さについて学ぶことができた。活動班にしても企画班にしても決してひとりではすることはできなかった。もちろん私達自身を支えてくださった裏方や先生方も忘れてはならない。そういった方々も含めて連携、協力してできた子どもキャンプであった。これからはより一層仲間とのつながりを大切にして過ごしていきたいと思う。



キャンプファイヤーにて
子ども達が点火する様子

ESD子どもキャンプに参加して

数学教育専修 3回生 堀口大地

平成27年8月22日、23日の2日間を通して第4回ESD子どもキャンプが行われた。ESD子どもキャンプは、奈良市内のユネスコスクールから小中学生を集め、大学内と奈良町をフィールドに、ESDを学ぶキャンプである。今回は「とき～みんなの心がときめく瞬間（とき）～」というテーマでキャンプを行った。

私はこのキャンプで学んだことは3点ある。第1に班内でのスタッフ間の関わりについて。第2子どもとの関わりについて。第3にESDを子どもたちに伝えられることが出来たかである。

第1は班内でのスタッフ間の関わりについてである。今年は班に入り子どもたちとキャンプを過ごした。その中で私が気をつけたことが2点ある。1点目は班長のフォローに専念したことだ。その理由は、班を引っ張るのではなく、班長のフォローをして班活動が円滑に進めるように動こうと考えたからだ。実際にしたこと

として自分が考えた意見をそのまま言うのではなく、班長の意見を聞いてから発言しようとした。一步引くことによって自分が持っていた意見と対比してその時点で必要な事なのか不必要な事なのかを吟味することができた。また、班で行いたいこととキャンプ全体で照らし合わせることによって、キャンプ全体の動きも見えるようになり去年までとは違った動きができたと思う。2点目は1回生が戸惑うことなく動けるように話かけ続けようと考えた。私の班には1回生が1人いた。子どもたちに声をかけるのと同じくらい1回生の後輩にも声をかけた。当日の朝はとても緊張している様子であったが、時間がたつにつれて緊張が和らいでいくのが分かった。自分自身や自分の班だけではなくキャンプ全体のことも考えて動けたと思う。

第2は子どもとの関わりについてである。私の班はスタッフ4人に対して子どもが3人と少なかった。この珍しい状況で1泊2日を子どもたちと過ごすことになった。私が子どもたちに対して行ったことが2点ある。1点目は自分が全力で楽しむことである。学生スタッフが楽しんでいないのに子どもに楽しめというのは無理だと考え、まず私自身が楽しむことにした。基本的なことだが子どもも同じように楽しもうとしていたのが分かった。2点目はマイナス発言の禁止である。一日目のお昼頃から子どもたちが悪口を少しずつ言っていたので私がマイナス発言の禁止を提案し、もしも、破ってしまった場合は次のプログラムを全力で頑張るという約束をした。この提案をしてから雰囲気も良くなり午後からのプログラムも目一杯楽しんでもらえたと感じた。二日目もこのルールが子どもたちで続いており最後までいい雰囲気でキャンプが終わることができた。

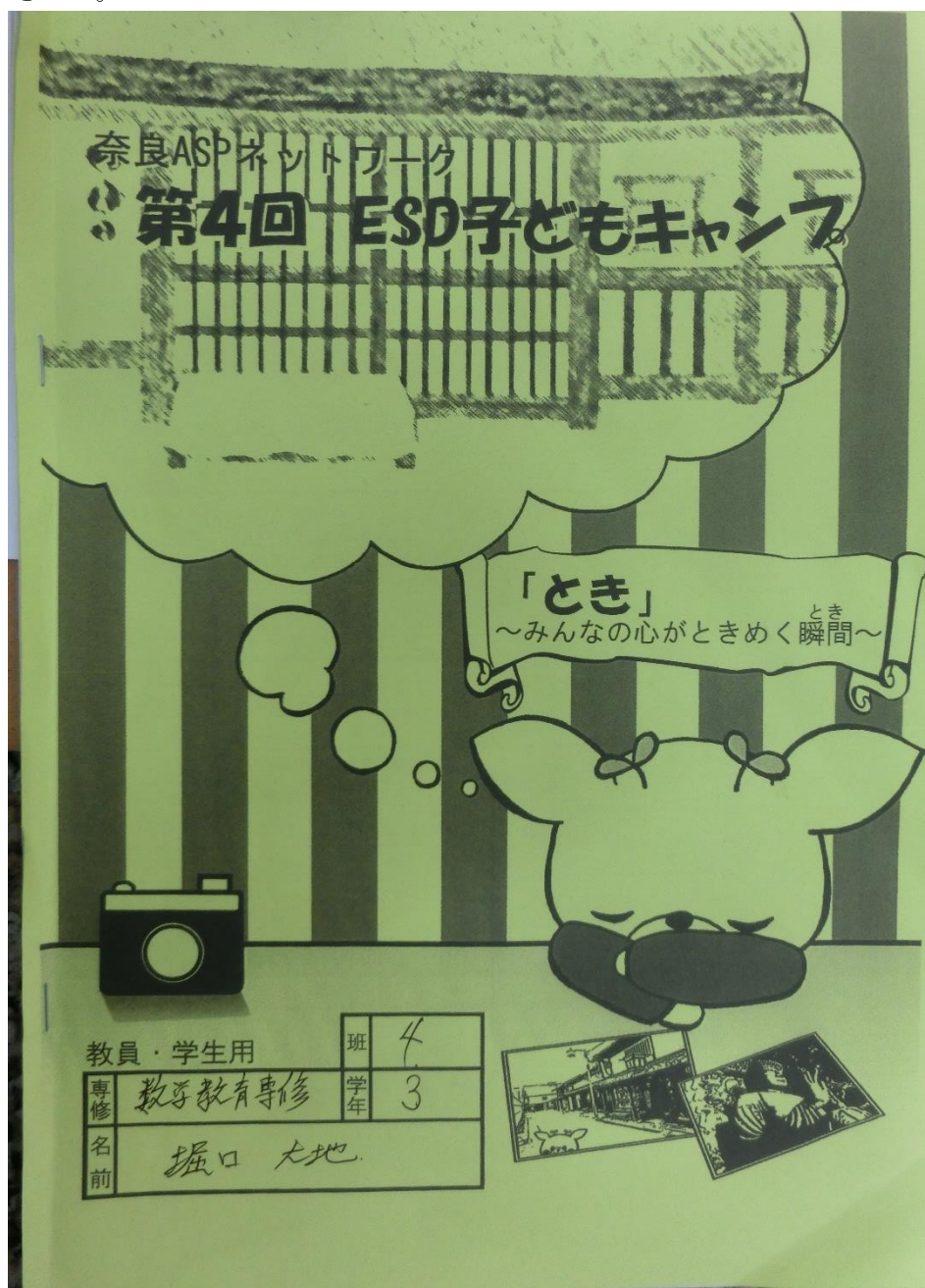
第3はESDを子どもたちに伝えられることができたかである。今年のフィールドワークではピンホールカメラを使って奈良町を巡った。子どもたちと楽しくフィールドワークをできたと思う。しかし、フィールドワークを企画してくれた方々が子どもたちに伝えたかったことを班の子どもたちに伝えられなかったと思う。その理由としては、フィールドワーク中に子どもたちから今年はなぜピンホールカメラだったのか、なぜピンホールカメラを使ったのか、またなぜ奈良町を巡ったのかという質問が出た。



フィールドワークでの集合写真

このことに対してきちんと考えて子どもたちにわかりやすく話せる準備を自分自身でしておくべきだったと思った。次のキャンプではどの役割になってもE S Dを感じてもらえるように子どもたちにアドバイスできるようになりたいと考えた。

以上より、今回のキャンプを通して私は周りの人を見て動くことの大切さを感じることができた。周りのことも考えて動くことは集団で活動するにあたって 必要な能力であり、教師としても必要な能力であるといえる。今後も周りを見て動くということを意識しながら様々な経験や活動に取り組み、学びを深めていきたい。



今年の子どもキャンプのしおり

E S D子どもキャンプを振り返って -反省と学び-

文化遺産教育専修 3 回生 佐野宏一郎

8 月 22 日、23 日の 2 日間の日程で第 4 回 E S D 子どもキャンプが行われた。今回のキャンプのテーマは「とき～みんなの心がときめく瞬間～」であった。私は活動班の 5 班の一員として参加し、同じ班の子どもたちと多くの時間を過ごした。

このキャンプを通して、2 つのことを考えさせられた。一つ目はキャンプの事前準備に関われなかったという反省について、二つ目は E S D の効果的な指導方法を自分なりに考えることができたという学びについてだ。

一つ目のキャンプの事前準備に関われなかったということについては、計画の時期はキャンプ以外のことで忙しかったが、私とほとんど同じ条件で計画の段階から参加していた人もいたので、準備段階で消極的だったことを反省したい。去年の振り返りでは初めての経験を活かして次のキャンプに少しでも多く貢献したいと意気込んでいたので、今回の結果は私にとっては不甲斐ないものとなった。この経験から、来年こそ全体を通して、キャンプに携わってきたい。

二つ目の E S D の効果的な指導方法を自分なりに考えることができたという学びについては、今回のキャンプで E S D の効果的な指導方法を自分なりに考えることができたということだ。キャンプの初めに加藤副学長が「E S D ってなんだろうということを頭に入れてキャンプに参加してください。」とおっしゃっていた。私自身も、今回のキャンプからどのようにして E S D を見出せるのかということに着目して臨むことができた。今回のキャンプではピンホールカメラを自作し、自分のカメラでお気に入りの写真を撮影するという企画がメインであった。私はこの企画で子どもたちが写真の中からいかに E S D を見つけられるかが趣旨になると考えた。写真そのものから見出すだけでなく、撮影した理由などの写真から語られる背景や物語的な部分も含めて“E S D とは？”を見つけれられるよう工夫して子どもたちに接した。具体的には、ならまちでのフィールドワークでは、行く先々での自分の知っている伝説や歴史について話をし、子どもたちの興味が引くように工夫した。このようにその場所にまつわる物語や知識を話すことは子どもたちのカメラのシャッターを切りやすくすることにもつながった。今回のフィールドワークでは時間内に写真を撮ることが最低条件であったが、当初子どもたちはなかなか撮影場所を決めきれずにいた。写真を一枚しか取れないということがプレッシャーになっていたかもしれないが、いろいろな話をすることで、撮



自作のピンホールカメラでいざ出発！

影場所を決めることができ、良い効果を与えることができた。また、単にその場所における歴史などを教えるように話すだけではなく、例えば「興福寺の三重塔は今から 800 年も前に建てられたのに、なぜ今まで廃れることなく残ってこられたのだろう。」といったように子どもたちに質問をし、考えさせる形式をとった。さらに、子どもたちの気づきや、「すごい」といった単純だが直接的な感性を大事にした。自ら発見し学ぶ姿勢が、実感を得やすいので、E S D を学ぶうえで効果的なのだと考えた。

今回のキャンプでは E S D について自分なりに考えることができ、また、新たな発見もあった。また、今回のキャンプの反省から来年の自分への自覚ができた。今回学んだこと、反省しなければならないことなどを活かして、年に一度のキャンプだけにとどまらず、色々な場面で E S D について考え、学び、行動していきたい。

子どもキャンプから学んだこと

理科教育専修 2回生 田中篤志

今年のE S D子どもキャンプでは「とき」をスローガンに掲げて、心がときめく一瞬を大切にしたいという思いを持ってキャンプを運営しました。一日目はオリエンテーションから始まり、大学キャンパスの探索と奈良町の探索とキャンプファイヤーを行いました。二日目には朝散歩とフォトフレームの作成と発表といった忙しく大変な日程でしたが、それぞれに心ときめく瞬間があり、楽しさとともにたくさんのことを学んだキャンプとなりました。

私にとって、このキャンプがかけがえのないものになったと思った理由は3つあります。第1に様々な人に支えられて作り上げたこと、第2に朝散歩班の企画長をしたこと、第3に自分自身の成長です。

第1の様々な人に支えられたことについては、準備の中で感じました。2回生として迎えた今年のキャンプでは、運営の中心メンバーとして企画や班活動に取り組むことができました。しかし、私自身まだまだわからないことだらけの状態、先輩方に、アドバイスをいただいたり、無理難題を引き受けていただいたり、たくさんの場面で助けていただき感謝の気持ちでいっぱいでした。また、中心メンバーとして頑張っている同回生たちとは切磋琢磨しあって、たくさんの刺激を受けました。さらに、1回生の後輩たちが企画などを通して成長していく様子は自分のことのようにうれしく感じ、とても頼もしく感じました。

第2の朝散歩班の企画長をしたことについては、企画長を任せてもらい、いろいろなことを学びました。今回の朝散歩では昨年からの目的地を変えたり、流れを変えたり、自分たちで考えたオリジナルのゲームを入れたり、と様々な新しい試みを試すことができ、とても楽しみながら企画を作り上げていくことができました。しかしその一方で、前日の夜中まで打ち合わせをすることになったり、予定よりも時間がオーバーしてしまったりなどの失敗も多々ありました。その失敗から、後輩たちへの仕事の振り方や、時間管理の難しさ、一つの行動に対する責任など、たくさんのことを学ぶことができました。

第3に自分自身の成長についてはこのキャンプの準備中に感じました。私は今まで、こんなにも他者のために一生懸命考え、時間をかけて準備をし、何かを作り上げるという経験をしたことがありませんでした。キャンプに向けてうまくいかなかったり、怒られたりしたときに子どもたちのために頑張ろうと思った自分の存在に気付くことができました。子どもたちを喜ばせたいという一心で頑張ることができた自分自身のことがちょっと好きになれた瞬間だったと思います。

以上の理由から、私にとってこのキャンプはかけがえのないものになりました。このキャンプにかかわることができて本当に良かったと思います。今回のキャンプで得た経験を今後の活動に生かしていくことと同時に、これからしっかりと後輩たちに伝えていきたいです。



今年のテーマ「とき」

第4回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修 2回生 谷垣徹

2015年8月22日、23日の2日間にわたって、第4回ESD子どもキャンプが行われた。ESD子どもキャンプは、奈良市内のユネスコスクールから小中学生を集め、大学や奈良町を活動の場としてESDを体験的に学ぶキャンプである。大学内で行うキャンプは今回で4回目を迎え、今回は「とき～みんなの心がときめく瞬間(とき)～」をテーマとして開催した。このキャンプでは、本学学生、大学院生、教職員、そして現職の先生方との協働により、企画立案から当日の運営までを行っている。

私がこのキャンプを通して感じたことは、大きく分けて3つある。第1に企画段階での関わり、第2に子どもたちに感じてもらいたかったこと、そして第3に共に企画運営に携わった仲間についてである。

第1の企画段階での関わりについてであるが、私は今回企画班として、オリエンテーションとテーマ別フィールドワークの2つに関わった。オリエンテーションの企画においては、他の企画メンバーへのサポート役として関わった。2日間のプログラムの幕開けのアイスブレイキングという重要な部分であり、またあまり経験がなく不安に感じているメンバーも多く、様々なアドバイスを行うことでメンバーのサポートを行った。企画段階から何度も集まり、十分な準備や練習を行っていた。当日は、初めてにも関わらず、堂々と前に立って企画を進行し、良い雰囲気作りをする仲間の姿を見ることができた。そしてテーマ別フィールドワークの企画においては企画班のリーダーとして関わった。子どもキャンプの中核となるこの企画を、どのように作り上げるかを早い段階から話し合い、その内容にこだわって準備に長い時間をかけた。フィールドワークの予行演習を重ね、より多くの学生に参加を促し、企画の内容を知ってもらうように心掛けた。また今回は外部の方にもご協力もいただき、より内容の濃いものとすることができた。そのため内容的に非常に良いものができたと思うが、その反面、直前の準備においては、他の企画班や運営班との連携を十分に取ることができず、当日の進行に支障をきたしてしまったことが次回への反省点である。入念な準備と不測の事態への迅速な対応の重要性を感じた。

第2の子どもたちに感じてもらいたかったことに関して、今回私は企画班や活動班での関わりに加えて、このキャンプのテーマとして「とき～みんなの心がときめく瞬間(とき)～」を提案し、またテーマソングの作詞も担当した。ピンホールカメラを題材としたテーマ別フィールドワークをはじめとし、2日間のキャンプの中で子どもたちに感じてほしいことや伝えたいことを、このテーマと歌詞に込めた。ピンホールカメラでのフィールドワークを通したESDの学びとして、①一度しか撮影できないというピンホールカメラの特性と、一瞬の風景を



「伝えたい 大切なもの」

切り取るという「有限性」、②散策や撮影の際の友だちへの配慮や協力を通した「コミュニケーション能力」、③自分たちの暮らす地元に対する「地域愛」の3つをねらいとして設定した。私が活動班として関わった子どもたちには、2日間を通してこれらにつながる「ヒント」のようなことをいくつか話したが、彼らの行動や発言からこれら3つがどれも感じられた。また最後の振り返り発表会においても、

そのような言葉をたくさん聞くことができ、ねらいが達成できたのではないかと考える。

第3の共に企画運営に関わった仲間について。私自身、このキャンプの企画運営に携わるのは今回で2回目であった。昨年度は初めての参加ということもあり、上回生からの指示に従って行動し、自分に与えられた任務をこなすという形で参加していた。今年度は2回目ということもあり、自分がすべきことだけではなく、広い視野をもって全体の様子を見て、周りに指示を出したりサポートをしたりすること、また他の仲間がどのような行動



「大好きな 奈良の町」

をしているのかを見ることを心掛けた。そうした中で、ともに企画運営に関わった仲間のいろいろな面を見ることができた。初めての参加である1回生が、事前準備の段階から責任感をもって積極的に関わろうとする姿を見ることができ、また当日も自ら率先して行動し、運営としての働きや子どもたちとの関わりにおいても、大変頼れる存在であった。自分と同じ2回生においても、昨年度からの経験を重ね、先輩としての自覚を持ち、しっかりと全体を見渡しての行動や指示を出し、その場に応じた臨機応変な対応をとっており、これからのユネスコクラブを引っ張っていく仲間として、共に支え合って頑張っていきたいと感じた。そして先輩方の姿を見て、行動力、決断力、責任感の強さを感じた。キャンプを学生の手で一から作り上げる大変さとそれに対する努力、参加者やスタッフに対する徹底的な安全面・健康面への配慮、当日の急なプログラム変更に対する対応力など、学ぶべき点がたくさんあった。今回のキャンプを通して、同じ回生の中ではもちろん、回生を超えた先輩・後輩とのより強固なつながりを築くことができた。

このように、今回のキャンプを通してたくさんの学びを得ることができた。このキャンプは、見えないところで私たちをサポートしてくださった運営班のみなさん、先生方、地域の方々など、たくさんの人々の協力のもとに成り立っており、このような協力がなければ成功することは決してなかっただろう。昨年度は企画班、及び活動班の一班員として、そして今年度はそれぞれの中心として関わってきた。来年度はこれまでの経験を活かし、先輩方のように、キャンプの企画運営により責任感をもって中心に関わっていきたいと感じた。今年度の ESD 子どもキャンプは終了したが、これはまた新たなスタートでもある。来年度の第5回 ESD 子どもキャンプに向けても動き出し、またその他の活動や学生生活においても、今回築いた仲間とのつながりを大切にしていきたい。



「みんなの心が ときめく 瞬間 (とき)」

第4回 ESD子どもキャンプに参加して

英語教育専修 2回生 辻野光歩

平成27年8月22日、23日に第4回ESD子どもキャンプが奈良教育大学で行われた。私は、ESD子どもキャンプに参加するのは二回目であった。今回はキャンパス探検の企画を行い、キャンプ当日は、活動班の1班の班員として、子どもたちと一緒に活動を行った。今年度のESD子どもキャンプのテーマは、「とき～みんなの心がときめく瞬間（とき）～」というテーマであった。

私が今回のESD子どもキャンプで学んだことは3つある。第1に企画・運営について、第2に活動班での子どもたちの距離の近づけ方について、第3に自分の将来についてである。

第1には、企画・運営についてである。前回のキャンプで私は、DVD班の一員としてキャンプの運営を行ったが、その時は、DVD班の予定がなかなか合わず、キャンプ当日に慌てて作業をするようになってしまい、しおりの制作などを先輩に任せてしまっていた。しかし、今回のキャンプでは、事前に企画班で集まる日を何日か設け、しおりの制作や、キャンパス探検でどのチェックポイントを回り、どのような問題を出すのか、誰がどのチェックポイントの情報を調べるのかなどを話し合うことができた。今回のキャンプも企画班の中心として仕事をできなかったが、去年よりは、企画班の一員として頑張れたのではないかなと思う。企画、運営において、事前準備が大切だということを学ぶことができた。

第2に、活動班での子どもたち同士の距離の近づけ方である。私は、1班の班員であったが、1班の子ども達はおとなしい子が多く、女の子は初対面の人と話すのが得意ではないようであった。キャンパス探検やフィールドワークなどを通して男の子同士は意気投合し、仲良くなることができていた。しかし、女の子同士や、男の子と女の子の距離はあまり近づいていなかった。そのことに私は気付いていたが、どのようにすれば良いかわからず、とにかく子ども達が1人で歩くことがないように、積極的に話しかけるようにした。



キャンプファイヤーでの様子

すると、キャンプファイヤーの後の振り返りの時、ひとりの女の子が、「男子と女子があんまり一日目は話せなかったので、二日目はもっと話せるようにしていきたい」と反省点を述べた。そして、二日目には、フォトフレーム作りの時に男女で少し会話する姿が見てとれた。今までは、自分がどのように子ども達と関われば良いかということを考えてばかりで、子ども達同士の関係に目を向けることができていなかったように思う。しかし、今回のキャンプで、教師を目指す上では、教師と生徒の関係を考えることはもちろん大切であるが、生徒同士の関係について考えることが必要であると感じた。

第3に、自分の将来の夢についてである。今回のESD子どもキャンプに参加して、小学校の教員も将来の夢として考えるようになったということである。今までは、漠然と英語が好きだから英語の教師になりたいと思っていたが、このESD子どもキャンプに参加し、小学生と関わることで、小学校の教員も魅力的だと感じるできるようになった。

このように、第4回ESD子どもキャンプを通して企画、運営の事前準備の大切さ、子ども達同士の関係を考えることの大切さ、自分の将来について学び、考えることができた。これからもユネスコクラブやそれ以外でも、子ども達と関わる活動を積極的に行っていこうと思う。

ESD 子どもキャンプを通して

英語教育専修 2回生 黒木浩亮

私は、今年の夏にESD子どもキャンプに参加した。今回のキャンプは4回目のキャンプであり、それぞれの回のキャンプには違ったテーマが定められる。今回のキャンプでは「とき」というテーマであった。このテーマをもとに、私は様々なことを学ぶことが出来た。

私はこのキャンプを通して、とても印象的な「瞬間」を感じた場面が2つある。一つ目は、フィールドワークで過ごした「瞬間」であり、二つ目は、子ども達と同じ時間を過ごした「瞬間」である。

一つ目のフィールドワークで過ごした「瞬間」については、奈良町をめぐるフィールドワークの中で、ピンホールカメラを使って奈良の伝統的な建造物を撮った「瞬間」である。現代の時代において、便利な写真機器が溢れている中で、ピンホールカメラという現代ではあまり見ることが無いカメラを使い、そして歴史的な建物を撮影するという場面は、まさに「現代」という時代に居ながらも、「昔」という「とき」を感じた場面であった。普段の私達の日常生活の中でこのような体験をする事はまずないと思う。よって私は、フィールドワークで過ごした「瞬間」がとても心に残っている。

二つ目の子ども達と同じ時間を過ごした「瞬間」については、キャンプに参加してくれた生徒達と、同じ時間を共有することができたということである。このキャンプの中で私は、小学生や中学生達と、様々な体験を通して2日間の間、同じ「瞬間」を過ごした。今回のキャンプでは、大学生という立場でありながらも、自分は「教師」という立場で参加した。これまで自分が学生という立場で参加していた「キャンプ」や、友達や家族などで行う娯楽の「キャンプ」とは全く違っていた。ただ楽しむだけではなく、生徒達の健康管理などに常に気をかけ、また生徒達に伝えるべき事はしっかりと伝えなければならないので非常に大変であった。しかしながらそのような活動を通して教師として何をしなければならぬかということが少しばかり掴むことが出来た。そして何より生徒達と過ごした「とき」は自分の心の中に非常に印象に残っている。

このキャンプを通して、自分は生徒達と関わることの楽しさを覚えた。将来のキャリアを積む上でも非常に良い経験になった。このキャンプで学んだ事をこれから先もしっかりと生かしていきたいと思う。



フィールドワークの写真撮影にて

第4回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修 2回生 田中晴日

2015年8月22日(土)から23日(日)に、第4回ESD子どもキャンプが奈良教育大学で行われました。昨年に続き二回目の参加で、活動班のリーダーとオリエンテーションの企画長を務めました。子どもたちとの関わりの中で、楽しさも感じながらもうまく指示したり、班を引っ張っていったりすることができない自分が非常にもどかしく思いました。その中で、周りの先輩たちや同期のみんなの子どもとの関わり方は自分にとって勉強になりました。

今年は運営班として参加した昨年のキャンプとは大きく異なり、作り手として企画に大きく関わったキャンプでした。私がこのESD子どもキャンプで企画に関わり学んだことを2つ述べます。それは一つ目にオリエンテーションの企画長を務めたこと、二つ目に活動班のリーダーを務めたことです。

第1に、オリエンテーションの企画長を務めたことについてです。オリエンテーションはキャンプの一番初めのプログラムで、この企画のリーダーを務めるのはとても勇気のいることでした。しかし、周りの先輩や同期のみんなが、「何かあったら何でも頼っていいよ」と言ってくれたこともあり、企画長を担当することになりました。班員全員でゲームを考え、先輩に沢山アドバイスを貰いながら流れを作り、当日まで綿密に話し合いを進めていけたように思います。よかった点としては早い段階から企画が動き出し、計画的に打ち合わせを行ったこと、ゲームとゲームの間の流れがスムーズであったことです。反省点としては、プレオリエンテーションなどの事前にゲームを参加学生に見てもらう機会がなかったこと、運営側との連携が充分に取れておらず、当日の運営側からオリエンテーション側へつなぐ流れが悪かったことが挙げられます。次は運営側との連携を意識して行動したいです。

第2に、活動班のリーダーを務めたことについてです。私は活動班に入ったことがなかったので、子どもたちにどう接したらいいのか、まして、リーダーなど務まるのか非常に不安でした。そんな中、班のメンバーにとっても助けられました。よかった点としては、けが人や体調不良者が出なかったこと、スタンツが成功したこと、子どもたちみんながしっかりと発表できたことです。初めはなかなか緊張がほぐれず、どうなるかと思いましたが、次第に心を開いてくれて楽しく活動できました。反省点としては朝散歩の時に貴重品の管理ができていなかったこと、救急バックをお店に忘れてしまったこと、時間に何度か遅れてしまったことが挙げられます。特に貴重品の管理ができていなかったことは、班長としての責任への意識が足りなかったように思います。

主にこの2つの役割をした中で、自らが主体となって引っ張っていくことの難しさを実感しました。どうすれば言いたいことがうまく伝わるのか、そのコミュニケーション力や、的確な指示指導で人を引きつける力こそ教職に不可欠です。この体験と学びから、自分に足りないものとそれを得るヒントが見つけれられたように思います。



キャンプファイヤー

第4回E S D子どもキャンプ

英語教育専修 2回生 口脇和

2015年8月22・23日、奈良教育大学にてE S D子どもキャンプが開催された。奈良市にあるユネスコスクールに通う子どもたちと、フィールドワークをしたりキャンプファイヤーをしたりして2日間を共に過ごした。今回のキャンプのテーマは、「とき～みんなの心がときめく瞬間～」で、子どもたちはピンホールカメラを作って奈良教育大学の中や奈良町で写真を撮った。

今回のE S D子どもキャンプに参加したことを振り返ってみて、印象的だったことが3つある。一つ目は参加する立場から企画する立場への変化、二つ目は班活動でのリーダーの経験、三つ目に子どもとの関わり方である。

一つ目は参加する立場から企画する立場への変化についてである。私は昨年の第3回E S D子どもキャンプにも参加していた。昨年は、キャンプまでの準備の時には先輩に指示されたことをやっていくだけであったし、キャンプ当日はただ子どもたちと一緒に楽しんで終えてしまい、参加する立場だったなと感じていた。しかし今年は、キャンプ当日までに自分の担当する企画について意見を出したり他の企画のプレにも参加したり、企画する立場として準備ができた。参加者としてだけではなく企画者としてキャンプに関わることで、事前に準備することの大切さを学んだ。また、キャンプ当日も子どもたちと楽しむだけではなくフィールドワークでは時間や班員の体調などを気にしながら行動できた。教師になったら子どもたちの様子を気にしながら行動することが必要になってくると思うので、今回のこの経験はいい機会になったと思う。

二つ目は班活動でのリーダーの経験である。私は今まで何かのリーダーになって皆を引っ張っていくということをしたことがなく、今回班活動でリーダーをしたことが私にとってはかなり印象深いことであった。キャンプ当日での自分のリーダーとしての行動を振り返ってみると反省点ばかりが浮かんでくる。特に、自分のすべきことに精一杯で、班の雰囲気をあまり気にすることができなかった結果、班の子どもたちが男女で別れてしまうということが起きてしまった。それが私の一番の反省点である。リーダーの仕事が難しいものであることを実際に経験することで改めて感じることもできた。もし今回リーダーをしていなかったら今後このような経験をするこゝがなかったらと思うので、私にとってすごくいい経験となったと思う。

三つ目は子どもとの関わり方である。昨年のキャンプではとにかく笑顔で優しく子どもたちに接しようとしていたが、時には言葉や態度を少し変えてメリハリをつけることも大事だと感じた。今年のキャンプでは、班の子どもが少しわがままな行動や発言をしてしまった時に、最初の方は笑って聞き流していたのだが途中で「あかんで」と言えるようになった。少しくつい言い方をしてしまった後の子どもの反応が怖かったが、子どもは態度を変えずに私と接してくれたし、その後は、わがままな行動や発言も減っていった。優しいだけが子どもたちにとっていいのではなく、メリハリのついた関わり方が必要だということを今回学べた。このことは将来教師になっても大切にすべきことだと思う。

今回E S D子どもキャンプに参加して感じたことはたくさんあったのだが、特に印象に残った上の3つのことは、これから教師を目指していく者として経験しておくべきことであったと思う。いい経験ばかりではなく反省すべきこともあったが、それも含めてこれから生かしていきたい。



キャンプファイヤーにて

伝えること

音楽教育専修 2回生 柴田萌

昨年初めて参加したE S D子どもキャンプでは、私と同世代の仲間たちの視野の広さや、大勢の人を目の前にしたときの立ち居振る舞い方に、強い刺激を受けました。私は大勢の人の前に立つと極度に緊張してしまい、その緊張の中ではなかなか周りに目を配れないところがあるので、児童との接し方や私には無い視点の設定の仕方に学ぶところが多くありました。そしてそんな昨年の驚きを胸に二年目のE S D子どもキャンプとなった今回は、運営班という裏方から児童と関わることとなりました。違う角度から体験したキャンプでは、また違った発見が多くありました。

さて、今回のキャンプで私が学んだことの中でも印象的だったことが3つあります。第1に児童への物事の伝え方について、第2に人前で話すことへの緊張について、第3に裏方の仕事についてです。

第1の児童への物事の伝え方ですが、私にはキャンプ一日目の夕食と銭湯体験での注意事項を寸劇で児童に伝えるという役割がありました。人の前で話すだけでも苦手であるのに、ましてや劇となると非常に難しく感じ、楽しく正確に理解してもらうためにはと、頭を悩ませました。寸劇の中で、話の流れをパターン化することで理解しやすくし、小道具を使って面白味を加えました。寸劇後に児童から寸劇について話しかけられることが多かったので、印象的に注意事項を伝えることが出来たと感じ、達成感がありました。

第2に人前で話すことへの緊張ですが、その寸劇時にもやはり極度に緊張し、話の流れが飛びそうになってしまいました。しかし、寸劇を見ている児童たちがしっかり興味を持って目を向けてくれることで、よりしっかり伝えようという思いで何とか寸劇をやり通すことが出来ました。緊張して間違えることばかりに捕らわれず、伝えることを意識することが重要だと感じました。

第3に裏方の仕事についてですが、キャンプが滞りなく進むようにと、昨年のキャンプでは気が付かなかった様々な仕事がありました。裏方の仕事をしていたからこそ、子どもの発見・喜びを自分事として捉えることができ、役割の必要性を再確認しました。また、運営班だけでなく多くの方々のサポートの上でキャンプが成立していることを実感しました。

二年目のキャンプでも、私は緊張したし視野も狭いままでした。しかし伝えることの大切さと周りの支えを学んだことで、私はこれからも緊張しながらでも伝えたいし、周りから支えられながら視野の狭さの克服を目指したいと思いました。



キャンプファイヤーで伝えること

E S D子どもキャンプでの学び

英語教育専修 2回生 森本珠美怜

8月22日23日、奈良教育大学で第4回E S D子どもキャンプが行われた。私にとって2回目のキャンプであるが、企画班に深く関わりながらも、活動班の班長を務めたため、去年とまた違った学びを得ることができた。

さて、今回の子どもキャンプと昨年度の子どもキャンプを比較して考えたことが3つある。第1班長と



ファイヤーのようす

しての目配りについて、第2に企画班の準備から当日の進め方について、第3にキャンプを通じてE S Dを伝える難しさについてである。

第1の班長の目配りについては、初めて活動班の班長を務めたこともあり、自分の行動が正しいのか不安に思うことが多々あった。周りと比べて不安になり、ただ焦ってばかりであった。タイムスケジュールであっても子どもとの関わりであっても、班長が先を見て行動しなければならない。また子どもの様子にもいち早く気づかなければならない。私たち4班は子どもの数よりも学生の人数の方が多いという状況であったために、子ども一人ひとりと深く接することができたように思う。また途中で体調不良で大学に戻らなければならなかった子もいたが、班の先輩方に助けられ、うまく対応することができた。昨年度のキャンプより、班長としての自分の行動に責任を感じながら、子どもたちとの接し方や班運営の仕方など、学ぶことが多い2日間であった。

第2に、今年はキャンプファイヤーの企画を担当したが、1回生よりも上回生の方が少ないという状況での活動であった。キャンプファイヤーの企画に携わるのは初めてであったが、準備段階では週に1回集まることができ、打ち合わせも密にすることができた。今年はストーリー仕立てで進行を行った。その中で私は、2つのゲームを担当した。前に出ていることにも緊張したが、それ以上にゲームの説明を簡潔にわかりやすく伝えることが難しく苦労した。ここでも先輩方にアドバイスをいただきながらゲームを作り上げることができた。また、私はキャンプファイヤーのときの1回生のスタントやアンクロンの担当であり、今までの後輩として先輩方についていく立場から、後輩たちを引っ張っていく立場に変わった。不安もあったが、一緒に作っていく1回生一人ひとりが力を発揮してくれたために、先輩としての役割は果たせたように思う。当日ではひぐらしの集いまでの時間が押してしまい、結果的にゲームの数を減らしアンクロンもカットすることになってしまった。内容も急ぎ足になってしまうことが多く、悔しさが残るキャンプファイヤーになった。この想いを忘れず、必ず来年につなげていこうと思う。

第3に子どもにE S Dを伝える難しさである。去年の反省に同じことがあげられていたので、今年のキャンプの個人的な目標は、E S Dに関して子どもたちに何かしら感じてもらうことであった。テーマ別フィールドワークでは、からくりおもちゃ館でインタビューをすることができた。最後の発表では、子どもたちからインタビューで知った内容が出てきたので、E S Dの自覚はあまりないとは思うが感じるもののあるキャンプにすることができたのではないかと思う。しかしどうしても無理やりそのような話に持っていくことになりがちだったので、自分の中でもE S Dについてより考えを持ち、うまく伝えていけるようにならなければならないと感じた。

以上3点をふまえ、必ず第5回のキャンプにこの経験や想いをつなげていきたい。

E S D子どもキャンプ 2015

英語教育専修 2回生 千場裕子

私は今回のE S D子どもキャンプで沢山のことを経験した。二度目のキャンプということもあり、1回生のときのようにただ参加するのではなく、裏方のお仕事や事前準備の大切さに気付かされたキャンプとなった。子どもたちの笑顔やメンバーの生き生きした表情を見て、キャンプという特別な環境の中でどれだけ多くのことを学ぶことができ、そしてキャンプがどんなことにもチャレンジできるすごい力を持っていると改めて感じた。

私がこのキャンプで学んだことは3つある。一つ目に人と人とのつながりについて、二つ目に人前で話すことの難しさと他のメンバーの人を惹きつける話し方や立ち振る舞いについて、三つ目に人をまとめる力についての3つである。

一つ目は人と人とのつながりである。私がこのキャンプを無事に乗り越えられたのも班のメンバーの支えがあったからである。初めてみんなをまとめ上げ、引っ張っていかねばならない班長という立場で不安も多かった。その中で助言をしてくれる先輩がいて、言われたことを的確にこなしてくれる後輩がいたからこそ、3班がとても楽しい班になったのだと思う。キャンプはみんなで作り上げていくものだと改めて思った。



3 班のメンバーとの集合写真

二つ目は人前で話すことの難しさと他のメンバーの人を惹きつける話し方や立ち振る舞

いである。私は人前で話すことが非常に苦手であり、それを克服したくてオリエンテーションで人生初めてのゲームをした。ゲーム初めの練習を飛ばしてしまうなど、反省点はあるが、自分自身を成長させてくれたと思う。今回のオリエンテーションでの経験を通して他の方々が見ているときを見る視点が変わったと思う。他人が話しているのを、ただぼーっと話を聞くのではなく、よく注意して聞いてみると、抑揚があり、このような話し方だと、聞き手の注目を集められるのだと、勉強になった。

三つ目は人をまとめる力である。子どもたちは純粋で素直であると感じた。私たち学生の振る舞いをしっかり見ていて、気持ちを敏感に感じている。こちらの都合で時間がなく、叱ったり命令すればみんながついてくれるわけでも、ただ優しくして子どもに従ってばかりいても、もちろんダメである。子どもとの間、そしてメンバーとの間に信頼関係を築くことが、最も大切だと痛感した。

2回生になり1回生の時とはまた違う視点でE S Dキャンプに関わることができ、本当にたくさん学びがあった。そして、何より自分が心から楽しむことができた。キャンプは自分が真剣に取り組んで汗を流した分、得るものや感動が大きくなり、楽しいものになるのだということを感じた。キャンプを作り上げるために、沢山の方々の協力があって成り立っているかを自分の目で見ることもできたのが大きかった。ユネスコクラブでは教師になる上で必要な力を沢山学ぶことができるため、これからも頑張っていきたいと思った。

大活躍！縁の下の力持ち！

音楽教育専修 2回生 前川魅風

私は、第4回E S D子どもキャンプで、運営班として活動しました。運営班というのは、子どもがキャンプを楽しんでもらえるように裏で活躍する、いわば縁の下の力持ち班です。活動班の人よりは子どもたちと関わる機会は少ないですが、一歩下がった視点から子どもたちの様子を見ることができました。

私が今回のキャンプで気をつけたことは3つあります。一つ目は、子どもたちの水分補給、二つ目はスムーズな企画進行ができるようにサポートすること、そして三つ目に、自分たち自身もキャンプを楽しむことです。

一つ目の水分補給についてです。今回のキャンプの活動予定には、キャンパス探検や、奈良町のフィールドワーク、朝散歩など、屋外での活動がいくつかありました。子どもたちが元気であっても、夏の暑さの中、心配なのは熱中症です。私たち運営班はたくさんのスポーツドリンクやお茶を用意するために駆け回りました。苦労したのは、みんなに冷えた飲み物を飲んでももらいたかったので、飲み物を冷やすことです。クーラーボックスだけでは足りなかったので、国際交流室の冷蔵庫や、特別支援の中学校の冷蔵庫など、ありとあらゆる場所を借りて冷やしました。初めは冷やす場所が足りず、どうなることかと思いましたが、子どもたちが冷たい飲み物を飲むことができてほっとしました。

二つ目の、スムーズな企画進行のためのサポートについてです。私が印象に残っているのは、テントを片付けたことです。テントは大きいので、片付けるのに時間がかかるのではないかと不安に思っていました。また、炎天下の中の作業のため、子どもたちの体調も心配でした。ですが、運営班の私たちも手伝うことで、とても早く終わることができました。運営班はいざというときは活動班の一員としても活動しました。

三つ目に運営班である私たちも、キャンプを存分に楽しみました。運営班は裏方での仕事がほとんどでしたが、ゲームに参加したことや、晩御飯を活動班のみんなで食べることで、子どもたちとのふれあいも大切にできてよかったです。

私が運営班の仕事をしていてうれしかったのは、子どもたちの笑顔をたくさん見ることができたことです。暑い屋外から帰ってきたとき、冷たい飲み物を飲みながら、私たちを見ると表情が急に明るくなって、フィールドワーク中にあった出来事を話してくれました。子どもたちも企画を楽しんでくれたのが仕事をしていてやりがいがありました。たった2日間という短い間でしたが、学生が一丸となってキャンプを盛り上げたことで、子どもたち同士も団結力を深めることができたのだと思います。



運営班のメンバーでテント設営

E S D子どもキャンプ

特別支援教育専修 1 回生 板口咲希

今回のE S D子どもキャンプは私の中で大変意義深い物になった。私は朝散歩の企画と活動班、そして学生スタンツとアンクロンの演奏に参加した。どれも初めての事で、戸惑った事が多かったが、上回生の方にたくさん教えてもらい助かった。その甲斐があり、多くの事を学ぶ事が出来た。

上記に述べた中でも、心に留めておきたいと考えるものを3つ挙げる。一つ目は朝散歩班の活動について、二つ目は活動班での経験について、三つ目は学生スタンツとアンクロンをまとめて、キャンプファイヤーでの企画である。

一つ目の朝散歩班の活動では、二日目の朝食の前後の散歩を企画した。当初、キャンプの全容が全く掴めていなかったのも、よく分からないまま企画がスタートして不安だった。上回生の方が丁寧に概要を説明してくれたおかげで、その不安が解消された。しかし、この時点ではあまり考えが至らなかった点がある。それは企画が早めにスタートしたにも関わらず、中身が詰め切れなかった事だ。コントにしてもゲームの内容にしても、これをやると決めてから中身を整理していく作業に遅れが出た。これが原因で、コントに必要な物や人員、ゲームに必要な人員や事前説明が足りなく



朝散歩のコント

なった。そして運営側の方々ともコミュニケーションが取れず、朝食の計画も全く知らないまま本番を迎えて予定時間をオーバーしてしまうという事態を招いた。ここはしっかりと反省しなければならない。以上から朝散歩の企画では事前の準備がいかに大切かという事が分かった。逆に良かったと思う事もあった。それは、ゲームの進行案を作った事だ。これは上回生の方から教えて頂いた事で、慣れないうちは台本を作って頭の中にインプットした方が良いとのことだった。このことで、私はまず歌を覚えなければならないことや、子どもたちが色んな反応をした時の対策を考えなければならないことが見えてきた。その足りない部分をしっかりと考えられたので、必要以上の不安もなくゲームを進行できたのではないかと思う。

二つ目の活動班での経験についてである。これは主にキャンプに参加している子ども達を先導する役目である。反省すべき点は、当日までに全員で顔合わせ出来なかったことだ。上回生とは挨拶を済ませていたが、メンバー全員で顔合わせする機会が設けられないままだった。当日に初めて顔を合わせたので、調子も他の班に比べてぎこちなかったと感じた。反省会でも出た話だが、2班の仲が本当に深まったとは思えない状態であった。それは、大学生同士の空気のぎこちなさが子どもたちにも伝わったのではないかと考える。2日間の活動を通して班の中でも仲が深まる事はこのキャンプにおいて大切な事

だ。故に、必ず当日までに活動班で集まってお互いの立場や仕事の確認や注意点の認識の共有をしなければならない事が分かった。

三つ目は学生スタンツとアンクロンの企画についてである。これらについては、最初は本当に訳が分からず、なんとなく参加していた。学生スタンツでは、練習の初日の様子として、1回生の間でも遠慮の空気が流れていた。



活動班の2班

その中で、今回のような元気な台本は少し気をつけた方が良かったと思った。今回の台本では、いかに大学生という殻を破るか、というものであったので、練習の初日を失敗すると、後日の流れに支障を来す危険性があった。練習の時に元気よくすることができなかった場合、その雰囲気は本番まで続き、中途半端な学生スタントになってしまう可能性があったからだ。今回は成功を収めたわけだが、それが次回も同じような結果になるかはわからない。今回成功した理由は、上回生が行った上手い配役にあると考える。次回も成功できるように、来年の台本や配役に気を配っていきたいと思う。また、アンクロンに関しては、上回生の手助けがあり、2回の練習でも十分に全員が演奏できた。以上から、上回生の先導する力が重要であると思えたので、学生スタントとアンクロンにおいては、経験者を必ず入れる事が大事であると分かった。

以上の事から、様々な企画において上回生の方の力によって多くのことを助けて頂いたことが分かった。しかし、それでも失敗したり、成功したり、中途半端であったりした企画があった。その中で次回に引き継いだ方が良く、改めた方が良く、たくさんあった。この反省点を次に活かそうと思う事が、今の最大の学びであると考えている。



集合写真

ときめいたとき～第4回ESD子どもキャンプを終えて～

特別支援教育専修 1 回生 藤井愛華

ESD子どもキャンプが終わった。今までの活動は参加するだけであったため、初めて企画側として参加したこのキャンプの活動では、今まで参加した際の楽しさを子どもたちに感じてもらえるかということや、憧れの先輩方のようにユネスコクラブの一員として動けるか不安であった。失敗や反省点も沢山あるが、そのおかげで次の目標もでき、企画側として同級生や先輩方と動くことで、同級生や先輩方の素敵な姿を見ることができた。そのような実りに加えて、何より子どもたちとともに感じ、笑いあえた2日間のかけがえのない思い出も手に入れ、収穫の多いキャンプであった。

今回のキャンプのテーマは『とき～みんなの心がときめく瞬間～』であった。準備からキャンプの最後に至るまで、様々な人々と関わる中で、心がキラリときめく瞬間が多くあった。その中でもやはり、子どもたちと班で過ごした2日間は、ときめく瞬間にたくさん出会うことができた。その中で特に心に残っている瞬間を三つ書こうと思う。一つ目は奈良町での出来事、二つ目はキャンプファイヤー中の出来事、三つ目はキャンプファイヤーが終わった後の出来事である。

一つ目は奈良町フィールドワークをしているときのことである。子どもたちが、奈良町の家々にかけている身代わり猿について知らなかったため、庚申堂を訪れることにした。そこで班の先輩は、自分がこの場所を訪れた際の体験なども交えながら、身代わり猿について話をしてくれた。私も含めて班員は自然と「へえ～そうなんだ！知らなかったー！」と声に出しながら話に聞き入った。身近に昔からの言い伝えが大切に残されていることが素敵だと感じたこと、共に驚きながら学び、感情を共有できたことがとても嬉しかった。子どもたちも同じ気持ちだったのかもしれない。その後、身代わり猿の飾ってある吉祥堂の前を通り過ぎる時、班員の女の子が「写真を撮りたい！」といったのである。その子は、恥ずかしがり屋でおとなしい印象の子であった。そのため、奈良町のフィールドワークで、自ら撮りたい場所を決めて、言えないのではないかと心配していた。しかし、その子は班員の歩みを止めて、自分で撮りたいと言えたのである。きっと、先輩の説明などからここで撮りたいと強く自ら思える瞬間を感じられたのであろう。そのことが嬉しかったし、加えてその子が自分で声を出せたことも嬉しかった。以上が私の心に残っている一つ目の場面である。



庚申堂で身代わり猿について聞く



吉祥堂をピンホールカメラで撮影

残っている一つ目の場面である。

二つ目はキャンプファイヤー中のことである。1班はおとなしい子が多かった。そのため、班の子どもたちがみんなの前で大きな声を出したり、積極的にゲームに参加できるのか、キャンプファイヤーが始まる前に不安に思っていた。キャンプファイヤーでは、ゲームやスタンツがある。ゲームでは大きな声を出したり、自分で積極的に他の人たちと関わったりしなければ楽しめない場面が沢山ある。スタンツでは班ごとの発表もあり、1班のメンバーだけで、3分程度の発表をしなければいけなかった。スタンツは奈良町のフィールドワーク中からみんな考えて、帰り道やキャンプファイヤーが始まるまでの待ち時間に練習をしていた。しかし、先輩が子どもたち一人ひとりに与えた、一人きりでのセリフで女の子2人は、練習中であっても小さな声を出すのがやっとであった。練習でそうであったから、まして

や本番で大きな声は出せないだろうと思っていた。案の定、キャンプファイヤーが始まって女の子2人は恥ずかしそうにしていた。そして、1班の班別スタンプの順番がやってきた。練習と違って沢山の人が前にいる。しかし子どもたちは臆することなく、一人ひとりのセリフを、女の子2人も含めて練習以上の大きな声で堂々と発表できたのである。恥ずかしながら、うっかりセリフを言うタイミングを間違えてしまったのは自分なのであった。子どもたちは「びっくりしたよー!」と笑顔で許してくれた。緊張して言葉がなかなか出なかった子どもたちとは全く違う、堂々とした姿に私は驚いた。子どもたちの成長がとても嬉しかった。キャンプファイヤーも終わりに近づき、『♪陽気に生きよう』をみんなで輪になって踊った。右手で手をつないだのは吉祥寺で写真を撮った女の子。何度も繰り返すサビ。みんなの手をつないで集まって離れてを繰り返す。「夢が夢があーる一から一…うったおうじゃないーかあー…」みんなで歌って踊るのは楽しい、温かくて幸せだなあと歌いながらふと横を見た。すると、右隣の女の子も大きな声で楽しそうに歌っていたのだ。心の壁をなくせたのだと感じられて嬉しかった。何より楽しそうな大きな歌声が聞けること、楽しそうな笑顔が見ることができることが嬉しかった。その女の子の隣には1班のほかのメンバーたちの笑顔もあった。段々と1班のメンバーでいると安心して温かい気持ちになれるようになっていくことにも気づき、それも嬉しかった。

三つ目はキャンプファイヤーの後のことである。キャンドルを囲んで班で静かに一日の振り返りをした。日中の活動では全員で話すことはなかなかできていなかった。特に男子と女子の間には壁があった。しかし、優しい火が醸し出す雰囲気の影響だろうか、全員が素直な気持ちになって、思いを伝え合うことができていた。今日の初めはとても緊張していたこと、段々と緊張がほぐれて楽しくなったこと、だけど男子と女子の間に壁があって、あまり話せなかったのが残念だったから明日は話してみたいなどを話してくれた。普段仲のいい友達や、毎日顔を合わせるクラスメートが相手であっても、なかなか素直に思っていることを口にするのは難しい。しかし、今日会ったばかりの仲間を相手に班員全員が素直に気持ちを伝え合う時間が作れたことが美しくて素敵なことだと感じた。私はうまく自分の気持ちがまとめられず、伝えられなくてもどかしかったし、翌日、男女の壁が一気になくなったわけではなかったが、班員が心の距離を寄せて心地よい雰囲気になったことは間違いなかった。これが私の心に残っている三つ目の場面である。

このキャンプを通して子どもたちは何をもち帰ってくれたのだろうか。きっと、奈良のまちの魅力も、人と関わることの魅力も、沢山のときめいた瞬間とともに心で感じてもち帰ってくれたのではないかなと思う。来年のE S D子どもキャンプに向けて、企画側としての反省点や目標を生かしていくことはもち



最前列で一班ポーズをカッコよくキメて集合写真

ろん、子どもたちの心への贈り物がさらに素敵なきめく瞬間にできるよう、今年のキャンプを超えられるようなキャンプを目指していきたい。そして、その目標を実現するために、より目的意識をもって積極的に活動していきたいと思う。このキャンプを通して感じた自分自身の心のときめいた瞬間を忘れないように大切にしていきたい。

E S D子どもキャンプ

英語教育専修 1 回生 野瀬佳吾

私は初めての企画者側として、E S D子どもキャンプに参加しました。私は活動班、夕食銭湯班としてキャンプに携わることになったのですが、ユネスコクラブとは別に入部している準硬式野球部の活動が忙しくなったためにキャンプの準備にあまり参加することができなくなってしまいました。そのため、今回のキャンプではこういった企画が用意されているのか、それに向けた準備はどうなっているのかなど、キャンプの詳細があまりわからずに当日を迎えました。さらに当日、今回のキャンプに参加する1回生の男子が私だけということがわかって、ますます不安になりました。しかし、先輩方のサポートもあって、特に目立った問題もなく2日間のキャンプを無事終えることができました。

私は企画者側として参加した今回のE S D子どもキャンプを通して2つのことを学びました。一つ目に、子どもと一緒にいるからこそ気付けることもあるということ、二つ目に、人のつながりが大切だということです。

一つ目の子どもと一緒にいるからこそ気付けることもあるということについてです。今回のキャンプに参加する子どもたちの目的のひとつであった“発見すること”ですが、これについては参加者側だけでなく企画者側でも“発見すること”ができたと思っています。一日目の午前中に行われたキャンパスフィールドワークにおいて、奈良教育大学があるところは、昔、陸軍の兵舎があり、その当時使用されていた弾薬庫が現在も残っていて、周りの土の壁も万が一弾薬庫が爆発したときのために築かれた土塁であるということでしたが、これらの歴史は、あまりキャンプの準備に参加できなかった自分にとって大きな発見になったとともに、自分の通う大学についてもっと詳しく知れたという面でいい学びになったと思っています。



弾薬庫の前で集合写真

二つ目の人のつながりが大切だということについてですが、今回のキャンプを進めていくにあたって、多くの人の協力が必要になる場面がたくさんありました。フィールドワークの際に使用したピンホールカメラの制作から撮影した写真の現像に携わっていただいた方々、夕食、入浴の際にお世話になった飲食店、銭湯の方々、キャンプファイヤーでスタンプを披露して下さった先生方など、いろいろな場面で、たくさんの人たちの協力がありました。物事を成功させるためには、自分たちの力だけでなく、ときには周りの力を得る必要があるということを学びました。

最後に、私が今回のE S D子どもキャンプ全体を振り返って思ったことは、純粋にキャンプを楽しむという思いが強すぎて、学びの面が疎かになってしまったのではないかということです。確かに、企画者側もキャンプを楽しむということは大切なことだと思っていましたが、一日目の振り返りの時の先生のお話で、このキャンプは教員を目指す学生にとっての貴重な学びの機会であるということ気付かされました。この反省を生かして、次回の子どもキャンプは学びの場であるということをもっと意識して取り組みたいと思います。

第4回E S D子どもキャンプに参加して

心理学専修 1回生 井本美咲

私は大学生になって初めてE S Dという言葉を知りました。ユネスコクラブに所属して、いろんな場面でE S Dという言葉は耳にしましたが、「持続可能な開発のための教育」という言葉を見てすぐに具体的な意味は分かりませんでした。持続可能な開発って？何を？誰のために？と、いろんな疑問でいっぱいでした。

第4回E S D子どもキャンプは、E S Dについて学び合うこと、地域の良さを見つけて伝えること、みんなで活動し友情を育てることがねらいです。私がこの活動に参加して学んだことを振り返ると、3つのことが思い浮かびました。第1に人と関わることの楽しさ、第2に助け合うことの大切さ、第3にE S Dについてです。

第1の人と関わることの大切さについてです。私がキャンプを振り返って真っ先に思うことは「楽しかった！」ということです。アイスブレイクでいろんなゲームから始まり、さまざまな取り組みでたくさんの人と関わることができました。私はすぐに人と打ち解けられる性格ではないのですが、いろいろな出来事をきっかけに人と関わることの楽しさを改めて感じました。

第2の助け合うことの大切さについては、ピンホールカメラ作りや奈良町での撮影を手助けするなど子どもたち同士が助け合う姿を見たり、私自身も助けてもらったりしました。キャンプの活動は1人では出来ません。協力し合うことで得られる達成感もありました。活動班では、初めて会う人がほとんどの中でも、お互いに協力して新しい友情を育てることができていました。このキャンプでしか出来ない繋がりができたと思います。

第3のE S Dについてです。私はこのキャンプに参加し、体験を通じて、E S Dの理解を深めることができました。特にフィールドワークの振り返り発表会では、昔の人々が奈良の歴史や生活の中で得た知恵や知識を未来の人々に伝えたいという思いを感じました。今の私たちだけでなく、昔の人々もより良い暮らしについて考えていたのではないかと思います。このように過去から未来に、また同じ時を生きるさまざまな環境にいる人々に対しても、より良い暮らしをするには何をすればいいのか、そしてどう行動するかを、私たちは考えていかないといけないと思いました。

これらのことを第4回E S D子どもキャンプで学び、今の自分の行動や考えを見直し、これからどう行動していこうかを考えるきっかけになりました。より良い暮らしを目指すことに限界はないはずです。これからもっとE S Dについて理解を深めていきたいと思いました。



1日目の朝、全員集合です！

E S D子どもキャンプに参加して

英語教育専修 1 回生 朝倉史帆

8 月 22 日、23 日に奈良教育大学で E S D 子どもキャンプが開催された。このキャンプは、子どもたちと学生が E S D について学ぶ、地域の良さを見つけ伝えることができる、みんなで仲良く活動し友情を育てる、というねらいがあった。

私がこのキャンプを通して学んだことは 2 つある。一つ目に楽しむ側である参加者としてだけではなく、企画して運営する側として参加したこと、二つ目に子どもたちや先生方、先輩との出会いがあったことである。

一つ目の私は初めてキャンプを楽しむ側である参加者としてだけではなく、企画して運営する側として参加したことについては、企画・運営する側として、キャンパス探検を担当した。クイズを考えたり当日の劇、進行を話し合ったりした。今までキャンプを楽しんでいたのは、先輩方が長い時間をかけて企画していたからということを知った。今回のキャンパス探検班の話し合いでは、先輩方が出してくれた案に賛同しているだけで、私自身全くいい案が思い浮かばなかった。そのことが今回の E S D 子どもキャンプでの反省すべき点だと思う。

二つ目の子どもたちや先生方、先輩との出会いがあったことについては、私が今回の E S D 子どもキャンプに参加した理由のひとつとして、今まで小中学生と話す機会がなく、この E S D 子どもキャンプがその機会になると考えたからである。今回の E S D 子どもキャンプで、私は子どもたちと一緒に行動する班には入らず、運営班として活動していたため、他の活動班に入っていた学生よりは子どもたちと話す時間は少なかったが、それでも十分に子どもたちと話すことができた。また、今回の E S D 子どもキャンプでは驚くべき出会いがあった。キャンプファイヤーの時に教員スタントを担当していた先生が、私の中学校時代の先生だった。キャンプの最後の先生方のお話で、「この E S D 子どもキャンプで出会った子どもたちとスクールサポートや教育実習で再会することがある」というのを聞いた。まさに、その出会いが、この E S D 子どもキャンプの場であったのである。

以上のことから、私はこのキャンプで過ごした人がまた過去、未来の人とも繋がるということを見出し、それはこのキャンプだけでなく、また違う場で出会ったすべての人でも同じであると学んだ。本当にこの E S D 子どもキャンプに参加してよかったと思う。



みんなで集合写真！

初めての子どもキャンプ

文化遺産教育専修 1回生 山井 朋香

私がこの奈良教育大学ユネスコクラブに入ってから、外部の人たちと活動し、自分たちで企画を練って進行したのはこのキャンプが初めてだった。それまでに私が参加したことのある活動は奈良教育大学ユネスコクラブのメンバーだけで行われたもので、企画も進行も上回生の方々が仕切って行われていた。今回のキャンプは参加する側ではなく、運営する側にまわり、初めて経験することが多く、企画班のメンバーも少ないという状況で、経験のない私がしっかりやり通せるか不安だった。

しかし、準備を進めていく中や当日に子供たちと接することで気づいたこと、感じたことがあった。それは、一つ目にキャンプを自分たちで作りに上げていくという方針と、それに対する取り組み方が本気であるということ、二つ目に、子どもたちの目線で物事を考えることの難しさである。

一つ目のキャンプを自分たちで作りに上げていくという方針と、それに対する取り組み方が本気であるということについて、今まで何か行事を進めるときには、先生方のサポートの力が大きく、自分たちで一から考え、時間を作って皆で作りに上げていくということはなかった。キャンプは今年で四回目で、一回目からの先輩方の取り組みを参考に今年はどんなことをするかを決めるときは、本当に自分たちで考えて作っていかなければならないのだと実感した。上回生の方たちも私たち1回生を引っ張ってくださり、私たちが初めてのキャンプでどう行動すればいいのかを、準備の段階から自分たちの取り組みで示してくれたように感じる。私はこのキャンプ以前で先輩方が企画してくださったイベントに参加する中で、自分がこの立場になった時に、子どもたちの目線で行動することを念頭に、今回のキャンプでのゲーム進行や子どもたちへの接し方を考えた。キャンプでは本当に大学生主体で、準備や企画進行を進めており、自分たちで作りに上げているということが良くわかった。

二つ目は子どもたちの目線で物事を考えることの難しさだ。私はゲームを企画する立場にあり、初めて考えたゲームを、班のメンバーとアドバイスしてくれる先輩の前で披露したときに指摘されたことが、子どもたちがわかるような説明と話し方だった。私たちは参加する子どもたちより年上であるので、多少難しいルールや言葉遣いでも理解できてしまうが、子どもたちは必ずしもそうではないということを改めて考え、どうしたら子どもたちが分かってくれるかとセリフを考えるのが大変だったが、これまでにない経験だったので、楽しみながら考えることができた。

このように、今回のキャンプでは今までの自分が経験してこなかったことを経験した。それと同時に自分はまだまだだなと実感させられることも多々あった。今回の経験をもとに、自分自身もうまくやれるよう、一步ずつ進化していきたい。キャンプ前は不安しかなかったが、いざ終わってみると達成感でやってよかったと思えたので、自分の中ではキャンプは成功だったように思う。



朝散歩にて 震源地ゲームの様子

第4回 ESD 子どもキャンプを通して

家庭科教育専修 1 回生 川道美和佳

私は、今年初めて ESD 子どもキャンプに参加しました。小中学生とともにフィールドワークや、テントで寝泊まりをし、多くのことを学びました。

このキャンプでの主な学びは3つあります。一つ目はテーマ別フィールドワーク、二つ目は学生スタンツ、三つ目は活動班です。

一つ目のテーマ別フィールドワークは、最初このキャンプの中心的な企画ということも知らずに参加していました。初めは話し合いすら分からず、その場にいるだけという感じでした。しかし、写真館でのボランティアや、プレフィールドワークをやっていくうちに、段々と先輩方が言っていることが分かってきました。プレフィールドワークでは他の企画班の人に質問されても答えられるようになりました。今、こうやって振り返ると、最後まで先輩についていただけだったなとも思いますが、その分とても勉強になりました。反省点としては、当日の朝に用意しようと思っていたことを準備し忘れてしまったことです。まわりに迷惑をかけてしまい、準備の大切さを身にしみて感じました。

二つ目の学生スタンツでは、1 回生でひとつのものを作りあげることができました。私は同じ企画班に、他の 1 回生がおらず、関わりがありませんでしたが、このスタンツの練習を続けていくうちに、お互いを知ることが出来ていました。どの位置からでも見えやすいように立ち位置も工夫しました。本番でも恥を捨てて思いっきりスタンツをして、自分の殻を破ってスタンツに取り組んでいるということを子ども達に伝えられたと思います。

三つ目の活動班では、たくさん子どもと関わるすることができました。前に述べた 2 つは準備が物を言うものでしたが、これは当日どんな子どもが来るか分からず、私は実は普段から子どもと関わりがないので不安でした。しかし、私の班の子ども達はみんな話上手で、何事にも積極的でした。私の班だけピンホールカメラの写真がきれいに撮れず、みんなが記念物を作成している中、もう一度撮り直しに行くことになりました。フィールドワーク班の私がおもっとちゃんと撮り方を見てあげるべきだったという後悔の気持ちでしたが、子ども達は前向きに再撮影を行い、その結果、電線や木までしっかり写っているような綺麗な写真を撮ってきてくれました。反省点としては、子どもと学生は常にしゃべっていて関係も深まりましたが、子ども同士の関わりや会話が最後まであまりなかったことです。おそらく自己紹介の時間をあまり設けていなかったのも、お互い何と呼べばいいのかもわからず、活動をスタートしてしまったからだと思います。出会ってすぐの時間の過ごし方がとても大切だと思いました。

このキャンプに参加している子どもは全体的に色んな意味で恵まれている子どもだと思います。キャンプに参加しようという積極性、またそれに参加させようという保護者の方々がいること、しかし実際そうでない子ども達もたくさんいて、将来関わっていかないといけないのだ、と子どもと楽しく過ごしながら少し思いました。だから、このようなキャンプに参加してくれるような子どもだけでなく、色んな環境のもとにいる子どもと学生のうちに関わりたいたいと思いました。このキャンプの準備や当日で、自分自身少し成長できたような気がしています。来年は 2 回生になるので、このキャンプで学んだことを後輩などに伝えていき、先輩のようにキャンプを盛り上げていけるような存在になりたいです。



パルテ前で記念撮影

第4回ESD子どもキャンプ

英語教育専修 1回生 碓実緒

第4回ESD子どもキャンプが奈良教育大学で行われました。このキャンプはESDの学習、地域のよさを伝える事、友情を育てる事を目的としています。今回は、ピンホールカメラでこの目的を子どもたちと共に学びました。今回、ユネスコクラブで初めてキャンプに参加し、ピンホールカメラを使うのも初めての経験でした。2日間、活動班の学生スタッフとして、カメラづくりから活動の振り返りまで子どもたちと共に過ごしました。

2日間という短い期間ですが、キャンプを通して得たものがあります。それは、第1に新たなつながり、第2に物の有限性と大切さの実感、第3に新しい自分です。

第1の新たなつながりですが、2日間を通して、子どもたちや先輩と奈良町めぐりをしたり、キャンプファイヤーをしたりする中で、初めは他人だった子どもたちとお互いの様々な面を知り次第に打ち解けることができました。関わった時間は短く、人生においては「一瞬」かもしれませんが、これから同じ世代を作っていくつながりを広げることができました。

第2の物の有限性と大切さの実感ですが、子どもたちが作ったピンホールカメラを持ちながら、一生懸命に奈良の街並みを見つめる姿が印象に残っています。1枚しか写真が撮れないため、子どもたちは普段あまり注意して見ていない奈良の景色を見つめていました。また、自分で一生懸命作った大切なカメラであるからこそ、1枚の写真の大切さを感じているように思えました。昔から大切に受け継がれてきたものや地球環境のような大きなものが、私たちが大切に思うようになることで、持続可能な社会を作ることができると思います。ピンホールカメラがその第一歩になっていればいいなと思いました。

第3の新しい自分ですが、ピンホールカメラを作ること、劇やゲームを人前ですること、キャンプファイヤーなど今まで経験のないことがほとんどでしたが、子どもたちが楽しめる空気を作るために、全て全力で取り組みました。先輩方が明るい雰囲気を作っていく様子も見ることができました。子どもたちの成長を感じたのと同時に、自分自身の成長も実感できました。

今回のキャンプで私が反省している点は、これらの得たものを子どもたちと全部共有できなかったという点です。自分が感じたことをどう伝えれば、子どもたちの学びにつながるのか分かりませんでした。この反省を活かし今後このような経験をする中で進歩していきたいです。反省点も含め、新しく得ることが多いキャンプでした。



朝散歩後の集合写真

2年目としてのキャンプでの学び

英語教育専修 修士2回生 泉谷 忠至

2015年8月22日・23日に『ESD 子どもキャンプ』が奈良教育大学にて催され、今年度で二回目の参加となった。今年度は二日目だけの参加であったが、キャンプ当日までの準備期間も含め、キャンプ当日中に多くの学びを得ることができた。その学びについて以下に記す。

この第4回ESD子どもキャンプを通じて学んだことを2つ挙げる。一つ目に後輩たちにどのようにしてキャンプを伝えていくのかについて、二つ目にキャンプ当日における運営側での学びについてである。

第1の後輩たちにどのようにしてこのキャンプを伝えていくのかについてだが、今年度は企画班として「記念物」班に配属され、その班長を任された。記念物班は、1回生と院生が1人ずつという、自分も含め3人で企画を進める事となった。企画の内容自体は既に決められており、その中身をどのようなものにし、当日の進行をどのようにするかを考えていくだけであった。しかし、企画を進める中で、キャンプの流れや準備を後輩たちに十分に伝えることができるかが1番の悩みの種であった。2年目の私と違い、初めて参加する2人は、キャンプ当日までの流れを把握することは難しかったであろう。このキャンプを来年度につなげていくために、私は、自分たちの企画班が今何の準備をしており、どの程度準備が進んでおり、キャンプまで残り何をしなければならないのかのような、情報の共有を企画班の中で徹底した。キャンプ当日まで3人全員が集まって話し合いを行うことはあまりできなかったが、この情報共有により、準備は円滑に進んだように感じた。各々の割り当てられた課題に十分に取り組んでくれ、キャンプ当日の自分たちの出番においても全力で自分の責務を果たしてくれていた。彼らには来年度にさらに良いものを作り上げて欲しい。

第2に、キャンプ当日における運営側での学びについて述べる。今年度は運営班としてもキャンプに参加した。前年度の活動班では子ども達の様子を常に注意し、2日間の子どもの成長を見守っていた。その一方で運営班の仕事は、活動班がキャンプを円滑に進めることができるように、活動班とは異なる仕事が多かった。例えば貴重品の管理である。二日目のプログラムで、テントから離れた場所でのプログラムに移るにもかかわらず、いくつかの活動班で子ども達の貴重品が確認されていなかった。もし貴重品の確認を優先したとしてプログラムの時間を変更することは、その後のプログラムに大きく影響を与える可能性があったので、貴重品の確認ができるまでテントに運営班が待機する必要があった。このように運営班は活動班と異なり、全体への注意を常に行う必要があり、その場の状況に瞬時に対応する必要がある。しかし、この運営班の徹底された準備と臨機応変な対応があることによって、前年度に自分の活動班が問題なく活動が続けることができたことに気づくことができた。それと同時に、今年度も私の知る限り大きな問題もなくキャンプを終えることができたと考える。これも今年新たに得た学びである。

結論として、前年度に引き続き参加した今年度のキャンプでは、二年目の参加として、また新たな学びを得ることができた。来年度以降このキャンプ自体も持続可能なものとなるように、これからのさらなる発展を祈っている。



記念物班の活動の様子

第4回 ESD子どもキャンプ 活動報告書

専門職学位課程 1 回生 中井隆仁

今回私は奈良市内のユネスコスクール加盟校の小中学生が参加する2日間のキャンプに参加しました。主にキャンプの活動班としては1班の学生スタッフとして、プログラムの企画班としては記念物(フォトフレーム)作成の全体進行を行いました。

今回のESD子どもキャンプについて、次の2つの観点から振り返ります。1点目が1班の学生スタッフとして子どもたちとの関わりから感じたこと、2点目は記念物作成を通して子どもたちとの関わりから感じたことです。

まず1点目の、1班の学生スタッフとして子どもたちとの関わりについてですが、キャンプ初日の朝に子どもたちと初めて対面した時、積極的に子どもたちと話そうと思っていましたが、子どもたちの緊張感が自分にも伝わってきてしまいあまり話すことができませんでした。また、班の中に自分の気持ちを表現するのが苦手だと思われる子がおり、自分の中でキャンプを通してこの子と特に仲良くなって終わろうという目標を持って臨みました。ピンホールカメラ作りでは、アルミホイルに穴を開ける作業が子どもたちにとって難しそうでした。何回も失敗している子どもを「どうやったら上手くいくかな?」という風に、子ども自身が



ピンホールカメラで撮影している様子

行ったことについて振り返りをさせるように配慮をしました。ピンホールカメラでは、デジタルカメラのように撮り直しや、すぐに撮ったものを見ることができないので、子どもたちは1回しかないチャンスはどこで使おうか緊張した面持ちで撮影を行っていました。キャンプファイヤー内で行ったスタントでは、この1日を一緒に過ごしてそれぞれが思い出に残っていることについて寸劇の形式で発表しました。練習では、前述した子があまり大きな声を出せていなかったのですが、本番では今までで一番大きい声で発表をしている姿を見て、この1日でも成長する姿をみることで感動しました。さらに、最後の振り返り発表会でも自分が作ったフォトフレームについて堂々とみんなの前で発表を行っていて、キャンプを通して大きく成長する姿を見ることができました。

次に2点目の、記念物作成を通して子どもたちとの関わりについては、私はフォトフレーム作成の説明を担当しました。全体の進行は、予定の時間内で行いたかったことを行うことができたので問題はありませんでしたが、いくつか子どもたちにとってわかりにくい説明をしてしまいました。さらに子どもたちの立場にたって考え、本当に作成しやすい内容なのか検討していく必要がさらにあると感じました。しかし、子どもたちは最後の振り返り発表会において自分で作成したフ



発表している様子

ォトフレームを示しながらESD子どもキャンプで学んだこと感じたことを堂々と発表している姿をみて、ESD子どもキャンプに参加できたこと、記念物作成を担当できたことをうれしく感じました。

最後に、「来年来ます」と言ってくれる子どももあり、こうして継続的な学びが形成されていくのだなと感じました。

第4回ESD子どもキャンプに参加して

理科教育専修 修士1回生 後藤田洋介

第4回ESD子どもキャンプが、8月22日23日に奈良教育大学のキャンパス内で開催された。ESD子どもキャンプは、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生と本学学生が、ESDを体感的に学びあうことをテーマに開催されている活動である。昨年度は、奈良町の古写真をもとに未来のまちについて考える活動を展開した。本年度の活動は、ピンホールカメラを用いて、参加児童生徒の、未来に残していきたい奈良の町を題材に活動を行った。

このESD子どもキャンプに参加して感じたことを、3つの視点から振り返る。それは、第1に児童生徒に何を学んでほしいのかについて、第2にESD勉強会について、第3に運営体制のこれからについてである。

第1の児童生徒に何を学んでほしいのかについては、今回の活動では、ピンホールカメラを用いて活動を行った。ピンホールカメラは中を黒く塗った箱の中に印画紙を貼り、小さな穴から光を通し、印画紙が感光し、写真が撮れるという、単純な装置である。しかし、この小さな穴のあけ方、感光時間によって、現像後の写真がきれいになるの



ピンホールカメラの写真集

かが決まるのである。今回の活動は、

19名で行った。一回目の現像では、5

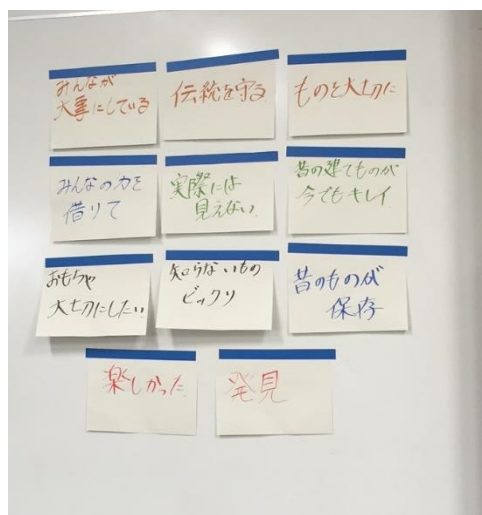
班中4班がうまく撮影をすることができた。残りの1班については、二回目の撮影でもうまくいかず、二日目に三度目の撮影を行った。撮影では、一回目に奈良教育大学構内を、二回目に奈良町を、三回目を行った班は、奈良教育大学構内を撮影した。この撮影した写真をもとに、最後の振り返り発表会を行った。振り返り発表会では、多くの児童生徒が、奈良町の写真よりも、大学構内の写真を用いていたのが印象的であった。教育資料館が昔から保存されていることに驚いたというような発表が多かったこと、私が班活動に関わっていなかったことから、どちらともいえないが、児童生徒はうまく撮影できた写真を選んだのではないかと思う。ピンホールカメラの写真を通して、奈良の町をどうしていきたいかを考えもらうことを意図としていたので、この点を伝え切れていなかったことが、今回の反省点である。活動班に入っている学生に、きれいさよりもメッセージを優先するなどの連絡をしておくべきであったと感じた。

第2にESD勉強会については、今回は、ピンホールカメラを使った活動を中心としていたので、その活動で子どもが考えたことを、ESD勉強会に生かしたいと考えていた。このESD勉強会の時間を私が司会進行するのは、一昨年、昨年、今年と三回目となった。一昨年は学生が子どもから聞き出した内容をまとめ、「知っていると思っていた奈良公園に知らないものがたくさんある」というまとめを行った。昨年は子どもに「未来のまちをどのようにしていきたいか」を感想として書かせ、それをまとめた。本年度は、振り返り発表会として、子どもたちが発表した内容をまとめた。子どもたちからは、「伝統を守っていきたい」「みんなの力を借りて活動した」「知らないものがたくさんあって驚いた」などの発言があり、それをもとに、持続可能な社会について考える活動を行った。この内容を伝える上で、「過

去から伝わってきたものを未来にも伝える」ということと、「助け合う友達の輪を広げていく」ということを意識して活動を行った。この活動自体は、小学生や中学生には難しい内容であったのかもしれないが、勉強会の時間には、参加した子どものすべてが、私の方を向き真剣に聞き、考えてくれていた。このESD勉強会を意義深いものにするために、自分の伝える技術を向上させること、持続可能な社会について学び続けていくこと、そして、私が3年間していた活動を来年度できるような学生を育てていきたいと感じた。

第3に運営体制のこれからについてである。昨年度の反省として、キャンプ全体の運営を少数の学生に集中させ、それをあまり公開せずに活動してしまった、という反省をした。その反省を生かし、年度の初めより、昨年度の活動ファイルを引き継ぎとして作成した。その甲斐もあってか、今年の私の負担は軽減されていたかと思う。その一方で、運営体制の全貌を分かっていた学生が、何人いたのか疑問が残る。キャンプの全貌を知ること、各プログラムで学生が自分で考え行動し、適切な判断を下すために必要であると思う。教員主体のキャンプから、学生主体のキャンプへの移行が進んでいるが、それは、核となるのが教員であるのか、少数の学生であるのかの違いでしかないことが分かってきた。この子どもキャンプを通して、各学生が自らの判断力や、企画力をつけていくために、運営体制を変えていかないといけない。年度の初めより、全体の打ち合わせや、下見、しおりの提出などを綿密に決めておき、全体がどんな状況か把握できるような仕組みを作っていく必要があると感じた。

最後に、本年の活動で四回目となったESD子どもキャンプであるが、毎年、新しいテーマを設定している。そのテーマを生かせるような話の進め方、勉強会のための勉強、学生の運営について考えたが、来年もさらによい活動を参加してくれた児童生徒に提供するため、私を含めすべての学生が振り返りを行い、次につなげるための活動を開始していかなければいけないと感じた。



E S D勉強会のまとめ



参加者で集合写真！

第4回 ESD 子どもキャンプを終えて

美術教育専修 修士課程1回生 横井まどか

8月22日から23日に、第4回ASP子どもキャンプが奈良教育大学のキャンパス内で行われた。このキャンプに参加した子どもたちは、主に奈良市内のユネスコスクールに通う小学校5年生から中学校3年生である。キャンプのテーマは「とき〜心ときめく瞬間〜」であった。班でピンホールカメラを用いて世界に一枚だけの写真を撮り、仲間の大切さとESDがどのようなものであるかについて子どもたちに感じてもらうことを目標としたキャンプであった。私は運営の裏方として、主に写真を撮ることに専念しながら今回のキャンプに参加した。

私がこのキャンプで学んだことが2つある。一つ目は下回生の活躍について、二つ目は裏方の動きについてである。

一つ目の下回生の活躍である。大学院生となつてからあまり活動に参加することがなくなっていたため、キャンプ初日の朝、約半分の下回生の顔と名前が一致していない状況でキャンプが始まった。うまく下回生たちと行動できるか不安であったが、誰もが積極的に行動しており、それぞれの活躍を見ているうちに、どの子がどんな子であるかなどがすぐにわかるようになり、昼過ぎには最初に感じていた不安はなくなっていた。特に一回生と二回生は、班に入っている・いないに関わらず周りの子どもたちやユネスコクラブのメンバーと積極的に関わっており、彼らが中心となって誰



初日のアイスブレイキングの様子

とでも話しやすい雰囲気を作り出していた。この下回生たちの積極性は、緊張していた子どもたちだけでなくクラブのメンバーたちの緊張もほぐしていたと思う。最初のアイスブレイキングの様子からもその様子が伺えた。私は主に写真を撮ることに専念していたが、写真からもその様子が伝わって来ると思う。

二つ目の裏方の動きについてである。今回のキャンプは、昨年度よりも運営のメンバー数が減っていたが、昨年度以上に運営のメンバー同士がやるべきことを把握して行動できていたと思う。特にリーダーの糸さんは、全体をよく見て、裏方のメンバーに指示を出せていた。ただ、人数が少ない分、時間の情報についてのやり取りが不十分な部分も一部にあったと思う。特にフィールドワークと夕食・銭湯で子どもたちが学外に出ている時は、班長の状況把握のやり取りがうまく行かないことが多かった。これは昨年度もそうであったので、来年度にはもう少しスムーズに状況確認ができるように工夫していきたい。

今回のキャンプは、時間が大幅に押すなど予定通りにスケジュールが進まないことが多く、不安に思う部分も多々あったが、みんなが協力・工夫したことで成功に終わったと思う。特に下回生の成長は目覚ましいものであった。この経験を生かし、来年度のキャンプにも生かして行って欲しいと思う。

第4回ESD子どもキャンプ
ピンホールカメラ作品集